

839 非慣性系における運動

ここでは非慣性系におけるラグランジアンについて考える。

まずは、もっとも簡単な並進運動について考える。

並進運動

慣性系 Π_0 に対して並進速度 $W(t)$ (並進方向位置の関数はない) で動く系 Π' を考える。このとき, Π_0, Π' における粒子の速度 v_0, v' の間には

$$v' = v_0 - W(t)$$

の関係がある。これは図を書けばすぐに分かるが、もっと強力な考え方をといておく。
この考え方は強力なので、必ず書けなくてはならない。

Π' は Π_0 に対して並進速度 $W(t)$ で動いている。これより, v' を求めるためには、はじめの速度 v_0 から系の動いた分 $W(t)$ を差し引くのである。

$$\underbrace{v'}_{\Pi' \text{ 系の速度}} = \underbrace{v_0}_{\Pi_0 \text{ 系の速度}} - \underbrace{W(t)}_{\text{はじめの速度 } v_0 \text{ から、座標が動いた分 } W(t) \text{ を差し引く}} \quad \dots ①$$

この考え方を身につけておけば、いちいち図を書いて確認する必要はない。以上、のちに分かるようにこの考え方は並進運動以外にもすべての座標変換について適用できる。

もう1つ重要なことがある。それは、ラグランジュ方程式のみならず、ラグランジアン自体も座標変換に対して値を(形式的に)変えないということである。すなわち、一般化座標 $q_i, \dot{q}_i$ ($i=1, 2, \dots, N$) で与えられたラグランジアン $L(q, \dot{q}, t)$, $L'(q, \dot{q}, t)$ に対して、

$$L(q, \dot{q}, t) = L'(q, \dot{q}, t) \left(+ \frac{d}{dt} f(q, t) \right) \quad (\text{形式的に})$$

が成り立つ、ということである。これはラグランジュ方程式が座標変換に対して不変であることを示す。

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} \right) = \frac{\partial L}{\partial q_i} \quad \Leftrightarrow \quad \frac{d}{dt} \left(\frac{\partial L}{\partial \dot{q}_i} \right) = \frac{\partial L}{\partial q_i}$$

の証明により、確認できる。このことは自力で確かめなければならないので、今回は省略する。

以上ですべての準備は整った。

今述べてきたように、ラグランジアンはどの系で書いても同じなので、もっとも簡単な
 Π_0 系（慣性系）のラグランジアンから出発する。ラグランジアンは

$$L_0(r_0, \dot{r}_0, t) = \frac{1}{2} m \dot{r}_0^2 - U_0(r_0)$$

となる。①を代入し

$$L'(r', \dot{r}', t) = L_0(r_0, \dot{r}_0, t)$$

ポテンシャルはスカラーなので、今回は
 変換が必要はない

$$= \frac{1}{2} m (\dot{r}' + V)^2 - U'(r') \quad (\text{但し } U_0(r_0) = U'(r') = U)$$

$$= \frac{1}{2} m \dot{r}'^2 + m \dot{r}' \cdot V + \frac{1}{2} m V^2 - U'(r')$$

$$= \frac{1}{2} m \dot{r}'^2 + m \frac{d}{dt} (r' \cdot V) - m r' \cdot \frac{dV}{dt} + \frac{1}{2} m V(t)^2 - U'(r')$$

$\frac{d}{dt} f(r', t)$ の形なので、変えてみる。

$$= \frac{1}{2} m \dot{r}'^2 - m r' \cdot A'(t) - U'(r') \quad \dots \textcircled{2}$$

となる。ここで $A'(t) = \frac{dV}{dt}$ は座標 Π' の慣性系にたいする加速度となる ($A(t) = 0$ のとき
 ラグランジアンは慣性系と同じ形になる)、これは

$$\frac{d}{dt} \frac{\partial L'}{\partial \dot{r}'} = m \ddot{r}', \quad \frac{\partial L'}{\partial r'} = -m A'(t) - \frac{\partial U}{\partial r'}$$

となり、以上より、運動方程式は

$$m \ddot{r}' = - \frac{\partial U}{\partial r'} - m A'(t)$$

代系で与える 並進加速に与り与える力
 ポテンシャル関係のみ

となる。これは高校物理でもよく知られた結果である。

回転座標系の場合

以上の考え方は、回転座標系にたいしても、エレガントに適用することが出来る（デカルト
 系を高速に回すとすぐだろ）。まず、 Π' と原点を共有し、角速度ベクトル ω で回るといふ系
 Π を考える。このとき、 Π 上の位置ベクトル r の点 Π' から見た運動 $\omega \times r$ で動いている。

よって、 r を求めるためには r から ω と r の分だけ“巻戻す”必要がある。

$$\mathbf{v} = \mathbf{v}' - \mathbf{W} \times \mathbf{r} \quad \dots \textcircled{3}$$

とわかる。

次に、②の第2項について考え、第2項の

$$\mathbf{r}' \cdot \mathbf{A}'(t)$$

は、座標の回転変換について不変という意味でスカラーであるから、

$$\mathbf{r}' \cdot \mathbf{A}' = \mathbf{r} \cdot \mathbf{A} \quad \dots \textcircled{4}$$

とわかる。ここで $\mathbf{A}(t)$ は $\mathbf{r}$ 系から見たベクトル $\mathbf{A}'(t)$ の表現である。

[$\mathbf{r} \cdot \mathbf{A}$ がスカラーであることの証明]

$\mathbf{r}' \rightarrow \mathbf{r}$ は回転変換なので、基底の変換行列 $\mathbf{R}(t)$ を用いて

$$\mathbf{r} = \mathbf{R}^{-1}(t) \mathbf{r}' \quad \Leftrightarrow \quad {}^t\mathbf{r} = {}^t\mathbf{r}' \mathbf{R}(t) \quad \dots \textcircled{A_1}$$

$$\left(\text{但し } {}^t\mathbf{r} = (0 \ 0 \ 0) \quad \mathbf{r} = \begin{pmatrix} 0 \\ 0 \\ 0 \end{pmatrix} \right)$$

とわかる(成分の変換行列が基底の変換行列の逆行列になっている。これは $\mathbf{r}$ が
固定ベクトルとして扱われるからである)。ここで $\mathbf{R}(t)$ は角速度ベクトル $\mathbf{W}(t)$ のまわりの
回転行列であり、それゆえよく知られているように直交行列である($\mathbf{R}^{-1} = {}^t\mathbf{R}$)。

また、同じように

$$\mathbf{A} = \mathbf{R}^{-1}(t) \mathbf{A}' \quad \dots \textcircled{A_2}$$

である。これ $\textcircled{A_1}$, $\textcircled{A_2}$ より

$$\mathbf{r} \cdot \mathbf{A} = {}^t\mathbf{r} \mathbf{A} = {}^t\mathbf{r}' \underbrace{\mathbf{R}(t) \mathbf{R}^{-1}(t)}_{=\mathbf{I}_3} \mathbf{A}' = {}^t\mathbf{r}' \mathbf{A}' = \mathbf{r}' \cdot \mathbf{A}'$$

である。

$\mathbf{r} \cdot \mathbf{A}$ が座標の回転変換にたいして値を変えないことは、ラグランジアンは座標の
とりかたにたいして形式的に不変であることを考えると、当然の帰結である。

※ 回転行列 $\mathbf{R}_3(t)$ が直交行列であること、直交行列の変換にたいして一般の内積
が不変であることは、常識としておく。

以上③, ④を②に代入して

$$L = \frac{1}{2} m (\dot{r} + (\omega \times r)^2) - m r \cdot A(r) - U(r)$$

$$= \frac{1}{2} m \dot{r}^2 + \frac{1}{2} m |\omega \times r|^2 + m \dot{r} \cdot (\omega \times r) - m r \cdot A(r) - U(r) \quad \dots ⑤$$

つまり, ラグランジアンが求まった! L の全微分は

$$dL = m \dot{r} d\dot{r} + \frac{1}{2} m (\omega \times r) (\omega \times dr) + \frac{1}{2} m (\omega \times dr) (\omega \times r)$$

$$+ m d\dot{r} \cdot (\omega \times r) + m \dot{r} \cdot (\omega \times dr) - m dr \cdot A - \frac{\partial U}{\partial r} dr$$

$$= m \dot{r} d\dot{r} + \underbrace{m (\omega \times r) \cdot (\omega \times dr)}_{\text{}} + m d\dot{r} \cdot (\omega \times r) + m dr \cdot (\omega \times \dot{r})$$

$$- m A \cdot dr - \frac{\partial U}{\partial r} dr$$

つまり, 必要

$$\underbrace{(\omega \times r) \cdot (\omega \times dr)}_{\text{}} = \epsilon_{ijk} \omega_j r_k \epsilon_{ilm} \omega_l dr_m$$

$$= \epsilon_{nim} (\epsilon_{ijk} \omega_j r_k) \omega_l dr_m$$

$$= \{ (\omega \times r) \times \omega \} \cdot dr = \underbrace{- (\omega \times (\omega \times r)) \cdot dr}_{\text{}}$$

つまり, 以上より

$$\frac{\partial L}{\partial \dot{r}} = m \dot{r} + m (\omega \times r)$$

$$\frac{\partial L}{\partial r} = -m \omega \times (\omega \times r) + m (\dot{r} \times \omega) - m A - \frac{\partial U}{\partial r}$$

つまり, ラグランジュ方程式は

$$m \ddot{r} + m (\omega \times \dot{r}) + m (\dot{\omega} \times r) = -m \omega \times (\omega \times r) - m (\dot{r} \times \omega) - m A - \frac{\partial U}{\partial r}$$

$$\therefore m \ddot{r} = \underbrace{- \frac{\partial U}{\partial r}}_{\text{位置エネルギー}} - \underbrace{m A}_{\text{並進による慣性力}} - \underbrace{m \omega \times (\omega \times r)}_{\text{遠心力}} - \underbrace{2m (\omega \times \dot{r})}_{\text{コリオリの力}} - \underbrace{m (\dot{\omega} \times r)}_{\text{角速度変化に伴う慣性力 (オイラー力)}}$$

つまり, これはニュートン方程式と等価であることが知られている結果である

遠心力は、H系において静止しているものの座標系にも受けられる。コリオリの力は $\dot{r} \neq 0$ のとき (つまり速度をもっているとき) に生じる。オイラー力は $\dot{\omega} \neq 0$ のときに生じる力である。

せっかくなので、H系におけるハミルトニアン H も求めておこう。運動量 p は

$$p = \frac{\partial L}{\partial \dot{r}} = m \dot{r} + m (\omega \times r) \quad \dots (6)$$

$$\therefore \dot{r} = \frac{p}{m} - \omega \times r$$

よって、つまり、ハミルトニアン H は

$$H = p \cdot \dot{r} - L$$

$$\begin{aligned} &= p \cdot \left(\frac{p}{m} - \omega \times r \right) - \frac{1}{2} m \left(\frac{p}{m} - \omega \times r \right)^2 - \frac{1}{2} m |\omega \times r|^2 \\ &\quad - m \left(\frac{p}{m} - \omega \times r \right) \cdot (\omega \times r) + m \dot{r} \cdot A(t) + U(r) \end{aligned}$$

となる。これは一見汚いが、展開するとなぜか大半の項は消えて、結局

$$H = \frac{p^2}{2m} - p \cdot (\omega \times r) + m \dot{r} \cdot A + U$$

を得る。

回転運動の一般論

さらに、 $\dot{\omega} = 0$, $A = 0$ のときを考察しよう。このとき、いろいろとおいしいことがたくさんあるのだ、論じることにする。

ラグランジアン L , 運動量 p は (5), (6) より

$$L = \frac{1}{2} m \dot{r}^2 + \frac{1}{2} m |\omega \times r|^2 + m \dot{r} \cdot (\omega \times r) - U(r)$$

$$p = m \dot{r} + m (\omega \times r)$$

となる。つまり、全エネルギー E は

$$\begin{aligned} E = p \cdot \dot{r} - L &= m \dot{r}^2 + \cancel{m \dot{r} \cdot (\omega \times r)} - \frac{1}{2} m \dot{r}^2 - \frac{1}{2} m |\omega \times r|^2 \\ &\quad - \cancel{m \dot{r} \cdot (\omega \times r)} - U(r) \end{aligned}$$

$$\therefore E = \frac{1}{2} m \dot{r}^2 - \frac{1}{2} m |\omega \times r|^2 - U(r)$$

となる。

遠心エネルギー

そこで、原点を共有する慣性系 K_0 と、回転系に於けるそれぞれの粒子の速度を v_0, v とすると、これら2つの間には

$$v = v_0 - \omega \times r$$

の関係がある。つまり

$$\underbrace{m v_0}_{\parallel} = m v - m(\omega \times r) = \mathcal{P} \quad (\text{K系の一様化運動量})$$

$\mathcal{P}_0$ (K系の運動量)

となり、

$$\mathcal{P}_0 = \mathcal{P}$$

が成り立つ。つまり K 系の一様化運動量は、K 系の運動量に等しい。